

学校通信

## 強い網

未来に向かって

小学校 校長 坂本 宏行

新学習指導要領改訂に向けて

2016年8/9月号

新版 第81号

編集

駿台甲府高等学校

駿台甲府中学校

駿台甲府小学校

昨年より、六年生の希望者を対象に英語への興味関心を高め、異文化体験をするための新たな取り組みとして「英語キャンプ」を本学園の清里高原ロッジで実施しています。3日間、常に英語を聞き・話す環境を実現し、英語活動（自己紹介・歌など）や異文化体験（ダンス・パーティー・キャンプ・アイヤーなど）をしました。今年の6年生は、自ら考え行動し、積極的に発表でき、素晴らしいチャレンジング・スピリットを発揮してくれました。

2学期がスタートしました。小学校では、運動会、中・高では学園祭という大イベントを終え、児童・生徒たちは新たな目標にむけてチャレンジしてくることを期待しています。

小学校では2学期に4・5年生が宿泊体験学習、また6年生は、今年度からコースを変更し、北海道への修学旅行を予定しています。児童にとって、宿泊を伴う行事を体験することは、成長を実感できる貴重な経験となります。チャレンジング・スピリットで臨んで欲しいです。

8月に文部科学省は、諮問機関の中央教育審議会（中教審）の特別部会に小中高の次期学習指導要領改訂に向けた審議のまとめ案を公表しました。2020年に小学校、2021年に中学校で全面实施、高等学校は2022年から学年ごとに順次実施されます。この学習指導要領はほぼ10年おきに改定されています。現行の指導要領は、「ゆとり教育」で減った小中学校の学習内容や授業時間を復活させ、今回も同様に学習内容は減らさない方針を打ち出しています。さらに、教師が一方的に話し、板書し、それを子どもたちがノートに書く受け身の授業ではなく、自分で考え、積極的に発表するなどの主体的に学ぶ力を育てることが盛り込まれています。知識を活用しながら他者と意見を交換し、課題を発見したり、探究する学習形態、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の導入が必須となるでしょう。

公立の小学校では、英語は現在、歌やゲームなどで楽しみながら学ぶ「外国語活動」として、5・6年生でそれぞれ週1時間（年間35時間）の授業が行われています。新たな学習指導要領

の改訂案では、変化の激しいグローバル社会でも自らの考えや意見を持ち、様々な国の人たちともコミュニケーションが取れるグローバル人材の育成に向けて、「外国語活動」を3・4年生に週1時間（年間35時間）の授業を前倒しし、さらに5・6年生では正式教科に格上げし、週2時間（年間70時間）に倍増されるということです。このことは、改訂前の2018年から先行実施が可能となるようです。

もともと小学校での英語導入には賛否がありました。聞く・話すを中心とした外国語活動が始まりました。年間の指導計画イメージは、「読む・聞く・書く・話す」の4技能の内、「話す」を「やりとり」（あいさつや短い簡単な指示に対応できる）と「発表」（身のまわりについて、簡単な語句を使って話せる）に分けた5領域となるようです。

本校では開校当時からネイティブ講師による英語の授業、1・2年生は週3時間、3・4年生は週2時間、5・6年生は週1時間が英語、週1時間が「外国語活動」（外国語活動のみ中高の英語教師が指導）を行っています。すでに駿高の英語科の協力も得て英語プログラムを改良しました。「低学年」では、歌やゲームなどでアルファベットに慣れ親しみフォニックス（綴り字と発音の間に規則性を明示し、正しい読み方の学習方法の1つ）を学び、英語への関心を高めます。「中学年」では、ワークブックを活用し、読み・書きの練習で文章へ慣れ親しみ、自発的なコミュニケーションも体験します。

「高学年」では、英語によるスピーチや質疑応答やプレゼンテーションなどを行います。4年後に改定される内容を既に先行実施しています。これは、これからのグローバル化、大学入試制度改革などにも対応できる12年間を見通したカリキュラムです。

また、IT分野で活躍する人材の育成を目的とした「プログラミング教育」が導入されます。技術的な内容は中学校からです。小学校ではプログラミングを専門にあつかう教科は新設せず、理科や算数や総合的な学習などで電化製品にプログラミングが活用されていることなどに触れるまでに限定されているようです。本校では、すでに駿台グループからの協力を得て、高学年を対象にプログラミング授業が体験できる講師をお招きし、「ロボット製作体験」の授業を計画し、今年度中には実現いたします。

さらに、2年後から「道徳」も特別教科に格上げされます。ただし、評価は数値化せず、記述式とし、相対評価を否定し、入試には使用しないとのことです。

知識偏重から知識活用へ、「何を学ぶ」が中心でしたが、これからは「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」と明らかに教育が変わろうとしています。今後も駿中・駿高、さらに駿台グループの協力を得ながら、子どもたちの将来を見据えた「真の学力」が身につく指導ができるよう、教材研究や研修を積み重ねていける環境作りを目指します。どうぞ「チーム駿台」をご支援ください。

## 中高ベトナム研修報告

グローバル教育推進室

室長 河崎 哲郎

2015年にグローバル教育推進室を立ち上げて以来様々なプログラムを実施してきておりますが、当研修もそのプログラムの一つです。

### 研修目的

①「真のグローバルリーダーから学ぶ」  
昨年度の文化講演会に、農業法人サラダボウル代表の田中進氏（本校8期生）を講師としてお迎えしました。本学園のグローバル教育推進室(GEC)の求める「真のグローバルリーダー」とベトナムでの新たなハイテク農業経営に夢を託す田中氏の姿が重なり、是非生徒たちに、実際にベトナムの地で田中氏から学んでもらいたいという思いでこの研修を実現させました。

### ②「異文化に触れ理解する」

異文化に触れ、日本以外の国の同年代の人たちと交流することで生徒たちの主体的な探求心を培うきっかけとするということ。今年3月と、5月に実施したマレーシアの姉妹校との交流で見られた本校生徒たちの大きな変化が刺激となつての目標設定です。今回交流した学校はホーチミン市にあるレホンフオン高校 (Le Hong Phong High School For The Gifted) という、理数と英語に特化したクラスのあるベトナム屈指の進学校でした。

### ③コミュニケーション力を身に付ける

上記①②の2つの目的に、もう1つ発信型の英語力の増強というものを加えました。

以上3つの目標を掲げこの8月1日

5日までの5日間、中高総勢16名でベトナム研修を実施致しました。

### 研修成果

#### 目的①について

単純に生徒の満足度ということ言えば、100%、大成功だったと言えると思います。田中代表の持つ人を魅了するオーラと力強いメッセージに生徒たちは感動の連続だったようです。到着時に生徒一人一人と握手し、別れるときもまた一人一人と握手して微笑みながら激励するそんな田中氏の人柄にも生徒たちは感動していました。研修内容をビデオ収録してありますので、ご興味のおありの方は河崎までご連絡下さい。いずれにしても、まだまだ未知の秘めた可能性を有する今回参加の生徒たち、きつと将来どこかでこの研修で得た種を発芽させ大輪の花を咲かせてくれるものと信じています。

#### 目的②③について

ベトナムの街の様子、交通事情などあらゆる点において日本とは違う社会（世界）を五感で感じた生徒たちの視野は大きく広がったと確信しています。特に今回初めて海外へ出た生徒もおり十分にその目的は達成できたと思えます。田中代表から日本語、英語に関わらずコミュニケーションの根本についてのレクチャーを受け、デイスカッション式に実践を行いました。レホンフオン高校では、同年代の生徒とのコミュニケーションということもあり、生徒の反応は目を見張るほど積極的なものでした。Practice makes perfect. 「習うより慣れろ」の言葉通り、生徒たちにとっては同年代と接することで恥ずかしがらずに英語を使えるのだからと改めて感じた場面でした。

## 科学オリンピックへの挑戦

高校 若林 秀則

国内科学オリンピックは、与えられた課題に対する得点を競うコンテストで、世界大会へつながります。各都道府県で行われる一次選考（筆記）での全国成績上位者から選出された80名程度の高校生が本選（筆記・実験問題）に出場します。今年度、7月中旬に山梨大学で行われました一次選考には、3年生を中心に、化学グランプリに85名、物理チャレンジに10名、日本生物学オリンピックに30名と多くの駿高生が挑戦してくれました。本校からは各分野1名ずつ、3名が選出され、8月に行われた本選へ出場しました。同様に化学・物理・生物の3分野すべてで本選に出場したのは初めてのことになります。このコンテストへの挑戦を機に、科学への興味関心が高まり、理解や探究が深まって欲しいと思います。

### 化学グランプリ 銅賞

3H 河西 絃生

化学グランプリ本選では一泊二日の日程で筆記・実験の両方を含む、計4時間の試験が行われました。教科書でしか見たことのないクロマトグラフィや分子模型の作成、沈殿生成など、普段の授業では経験していない問題が多く、難しい内容でしたが、興味深いものばかりで、あつという間に時間が過ぎました。扱ったことのない実験器具が多かったものの、学校での実験対策を通して、雰囲気は分かっていたため、落ち着いて取り組みました。夏休

みに対策のために実験を準備をして下さった小笠原先生にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

### 物理チャレンジ 優良賞

3H 反頭 康裕

物理チャレンジでは自分が思い描く「天才」と呼ばれる高校生（国際物理オリンピック金メダル受賞者など）に出会い、良い刺激を受けることができました。4日という短い期間でしたが、皆とてもフレンドリーな参加者ばかりで、楽しい時間を過ごすことができました。実験や筆記課題に求められるレベルはとて高く、心がバキバキにへし折られましたが、優良賞をいただき、更に物理学への興味が高まりました。この経験を今後の科学探求の原動力にしたいと思えます。後輩の皆さんにも是非、高校1年生のときから科学オリンピックに挑戦して欲しいと思います。

### 日本生物学オリンピック 敢闘賞

2H 向山 慶

生物学オリンピック本選は4日間の日程で行われました。ここで課された実験試験では、慣れない実験器具の正確な操作や要点を押さえたスケッチなどを行い、なおかつ、自分のもてる知識を総動員して正しい答えを導き出すことが求められました。知識の少なさを痛感しましたが、電気泳動の実験など有意義な体験ができました。また、全国の名だたる高校からの参加者が多く、彼らと交流できたことも貴重な経験です。ここで受けた刺激を忘れずに、頑張っていこうと思います。

### ひろしま総文 最後の一言

管弦楽部顧問 上原雅志

昨年の芸文祭で、芸術文化祭賞を受賞し、全国高等学校総合文化祭に出場できることになりました。本番まで、部員全員で意見を出し合い、数え切れない位、修正をして、広島に発つ数日前に、やっと曲の仕上がりが感じられるようになりました。出発前日、校長先生が全曲を通して聞いて下さり、その時に頂いたお褒めの言葉を心の支えに、広島に出发しました。

呉での前日練習はもちろん、8月2日の本番直前のチューニンググループまで話し合いを続け、曲を作り上げました。本番を待つ舞台袖で、部員同士「大丈夫だよ、できるよ」と声をかけ合い、励まし合って舞台上がりました。

「迎えた本番は、初めてのメンバーで初めての大舞台にもかかわらず、皆の表情は落ち着いており、一音一音を大切に、楽しみながら演奏できていたように感じます。静寂に包まれたホールに、私達の音が豊かに響き渡っているのが大変心地よく、演奏を楽しむ、ということができたのを、この全国の舞台で実感することができました。明るく照らされた舞台で皆が楽しそうに一生懸命演奏している姿を見て、何度も困難に直面したけれど、それらを乗り越えて、部員全員がこの舞台に立ててよかった、と感じたのを、今も鮮明に覚えています。最後の一言がホールに響いて消え、一瞬静寂のあとに大きな拍手で会場が埋まったとき、達成感と安堵感で手が震え、涙が出ました。」  
(青山舞部部長の県への報告書より)

お二人の審査員の先生の講評です。

「今回の大会で一番驚きました。何とこの質の高さ。弦楽器全員の音が本当に美しくこれぞ弦楽器というSound。和音の透明度、主旋律に対する伴奏の距離感。通奏低音と音程の良さ、すべてが今回の大会で特筆すべき演奏でした」(松浦修先生の講評より抜粋)  
「レヴェルの高さに圧倒されました。Soloだけでなく、バックの演奏のレヴェルの高い事が素晴らしいです。洗練されたヴィブラートや徹底された音響コントロール、完璧です。ハーモニ、Cantabile共にしっかりと作り上げられています。Solo二人の音が2Fまで伸びやかに鳴り響きます！Bravo！何より音楽的です！」(井上泰信先生の講評より抜粋)  
部員の努力に報いる、最高の評価でした(これも部員を泣かせました)。

ご指導くださったマヤ・フレーザーさん、校長先生を始め教職員や同窓会の皆様にも、励ましやお祝いを頂戴しました。部員達にとつて、一生心に残る全国大会でした。心からの感謝とお礼を申し上げます。  
これからも、楽しく音楽を続けたいと思います。  
※当日の演奏を、普通科HP、ニュース「ひろしま総文」のページでお聴き頂けます。



### 夏休みの美術の普及活動

美術デザイン科 岡田 昭夫

美術デザイン科では、長年にわたり夏休みを利用して、美術の普及活動を行っています。初めは、シルクスクリーンや夏休みの制作の補助など、教員が主体となって小中学生や保護者に指導する形を採っていました。

美術館で夏休みに開催されている『みなび』に関連したワークショップを何年か依頼されたことを機会に、徐々に生徒たちに指導を任せ、教員は準備や補助をするようにしてきました。ワークショップでは、普段あまり人と接するのが得意でない生徒たちが、楽しそうに生き生きと子供たちを指導していました。この貴重な体験は、自分や、自分たちのやっていることへの大きな自信を持たせてくれたように思います。

また、このワークショップで美術館の担当者の方々へ作った信頼が、美術館で美術デザイン科展ができるようになった大きな理由の一つでもあると思います。

現在は、夏休みに美術部のワークショップ『びでかつくりば』と夏休み美術科講座『はじめてのあぶらえ』を行っています。

今年の『つくりば』は、7月27日に県立図書館をお借りして、小学生から高校生と保護者を対象に、缶バッチやプラ版キーホルダーやラミネートカードなどを作りました。ワークショップに参加した生徒は20人。予定よりだいぶ多くの生徒が参加し、それぞれの参加者に作り方を説明したり、制作の手伝いをしたりし楽しい1日を過ごしました。

『はじめてのあぶらえ』は油絵の基礎講座で、親子で一緒に油絵を描きましようという事で始めたものです。1日6時間を3日間という本格的なものです。参加者のみなさんは驚くほど熱心に取り組んでくださいます。今年7月31日・8月6日・7日の3日間実施し、16組25人の方が参加されました。生徒たちもその中に混ざって制作するのですが、周りの参加者にいろいろ説明をしたり、実際にやってみせたりします。参加者からもいろいろ質問されたり、指導を頼まれたりと、忙しくしながら自分の作品も仕上げる事になりました。周りからの期待もありますので、プレッシャーがかかることとは思いますが、結構楽しそうに取り組んでいました。  
こういった経験を通して、学校外での活動やボランティア、自分の制作活動などには是非活かしてほしいと思います。



参加者の作品と制作風景  
3日目に参加されなかった方もいますので、全員の作品ではありません。



祝 初出場！(西関東大会出場)

中学・吹奏楽部担当 中村幸央

中学吹奏楽部は、今年で創部11年目です。創部当初は試行錯誤をしながら吹奏楽の最大のイベントである夏のコンクールに参加してきました。年々実力を付けて、同コンクールで好成績を挙げるようになってきました。指導者の天野佳奈先生の下、ここ2年連続で金賞を受賞し、今年の部員たちの年度始めの目標も「絶対金賞マジ西関！」というものでした。

そうはいっても中学B部門は参加団体が多く、その中で金賞を受賞することとは大変困難なものだと思います。過去の先輩たちの、金賞受賞に至るまでの努力も並々なものではなかったと思います。金賞団体の中から、特に当日優れた2団体に西関東大会の出場権を与えられるのですが、昨年は惜しくも次点で出場権を逃し、彼らは金賞のうれしさと西関東を逃した悔しさが混ざる複雑な涙を流しました。ですから、金賞・西関東は決して気軽に掲げられるような目標ではありません。

掲げたからには相応の練習を積み重ねなければなりません。先輩たちから受け継いだ練習法をしっかり行い、演奏曲を全員が心を一つに演奏することが最低条件。そこに何かが加わって初めて今まで以上の結果があるはずです。部員たちは「一心奏和」と書かれた揃いのハチマキを締め、あいさつや返事などから見直し、天野先生のご指導に必死についていきました。大会前の一週間はまさに「鬼気迫る」といっ

た練習光景が見られました。

演奏した曲は「アフリカ：儀式と歌、宗教的典礼」というもので、途中水笛で鳥の鳴き声を出したり、ホルンでゾウの鳴き声を出したり、聴いていて楽しい曲です。会場での聴衆の反応も、他校の演奏曲とは違う何かがあった気がします。演奏後は駿中生を見かけた他校生徒が「あつ、『パオーン』の学校だ」と言っていました。当日即売の演奏CDも本校分は完売し、追加で焼き直されるという状況でした。

結果は3年連続での金賞受賞、それに加えての西関東大会出場権獲得という、最高のものでした。当日はOBOGも裏方として荷物運びなどを手伝ってくれました。演奏後も発表まで残り、後輩の快挙を祝ってくれました。卒業生含めて皆で受賞の喜びを分かち合うことができ、部員は感謝しています。また、駿高吹奏楽部も高校の部で金賞を受賞したこと、心よりお祝い申しあげます。

西関東大会は9月10日コラニー文化ホールにて行われ、午前の部の最後に演奏します。最後に駿中12

期生、駿高28期生の、吹部出身の菅沼月子さんが甲府東高校で指揮を務めたことも報告します。彼女は駿中吹部の創部初代でホルンパートの大先輩です。



SUNDAI ENGLISH CAMP

小学校 長澤 宏治

昨年に引き続き、小学校では駿台清里ロッジで「SUNDAI ENGLISH CAMP」を行いました。対象は六年年の希望者で、全部で二十七名の参加となりました。

朝から晩まで、アメリカンカウンセラー(A.C.)とともに英語漬けの三日間を過ごすという内容に、キャンプ前に不安をもってしまいう児童も少なからずいました。しかし、実際にプログラムが始まると、あつという間にA.Cと打ち解け、笑顔があふれました。



二泊三日のプログラムは、英語活動(英語の自己紹介・劇・歌など)や異文化体験(アメリカンカーニバル・ダンスパーティー・キャンプファイヤーなど)となっており、どれも、とてもよく考えられていて、児童が生き生きと取り組んでいました。時間があまれば、英語のゲームをするなど、A.Cからのアプローチは常にあります。その積極的なA.Cの姿勢は子どもたちにも広がり、初日の夜に行ったダンスパーティーの際には、A.Cのアプローチが無くても一心不乱に踊っているほどでした。

英語キャンプを通して毎日継続して行っていたことが、英語での自己紹介と、グループ劇に向けてのアクティビティです。自己紹介では、A.Cと一緒に自分の伝えたいことを、英語でどのように伝えるのか考え、練習しました。最終日の発表では、ジェスチャーを交えながら、英語で立派に自分のことを「伝える」ことができました。グループ劇も、シナリオから子どもたちが考え、グループの特徴を出しながら楽しい発表をしてくれました。どちらの活動も、発表の内容を考える段階から、A.Cに自分の意図を伝えなければならず、自然と伝えようとする姿勢が身につけていたように感じます。



今回のキャンプを通して「A.Cと仲良くなれて、うれしかったし、もって一緒にいたかった」「英語をもっと話せるようになりたい。」ということに加え、「自分の意見を伝えることの大切さを学んだ。」といった児童の感想が出るなど、キャンプ前にあつた不安が嘘のように、前向きな状態でキャンプを終えることができました。今回のキャンプを、英語力の向上、更には文化の異なる人々ともコミュニケーションをとる、そのよさを理解していくきっかけとしてもらい、今後も幅広い視野を持ちながら成長していくことを期待しています。